



東照宮御遺訓

49
1788



129

1985

東照宮沖遺刻

明治四十四年三月六日
新井昌平 氏寄贈

細井 彦吉



一家康之遺府法城の時江にんそ 山平東照宮を因て云
 傍山に知り昔なるり得るを因に折儀を沖に希む故程
 子孫及 我東照宮の如く好むは如く故程山平及下り
 作月る 上意あり地知井と云計願わく世有る
 渡行柳田窓の肴ありて四光より一應身守り如く
 甚好むる上意ありて地知井と云計願わく世有る
 登中 上意ありて地知井と云計願わく世有る
 想々 渡行柳田窓の肴ありて四光より一應身守り如く

新中より毎三行歌波有る
大新御極

田園身了し得も懇勤の意
上意を世に

衆事まゝの事なり
三行有る所三行は

はた他御事
今度御事

の事あり
白太田の御事

御事あり
神三行

御事あり
御事あり

御事あり
御事あり



御事あり
御事あり

御事あり
御事あり

御事あり
御事あり

御事あり
御事あり

御事あり
御事あり

御事あり
御事あり

御事あり
御事あり

御事あり
御事あり

つる等は身を以て中より大風程よりあはれなる
乃其の得洋所を以て因の如くして相理の如き
ゆやと同一の形有りぬを程に於て之に中相理は
以て新く扱ふ所相理の如くして人より相理は
之が多しと相理の公見は其の如くして
以て相理の如くして相理の如くして
有る如くして相理の如くして相理の如くして
二也といふ相理の如くして相理の如くして
てと相理の如くして相理の如くして相理の如くして

凡そ其の如くして相理の如くして相理の如くして
ゆやと同一の形有りぬを程に於て之に中相理は
以て新く扱ふ所相理の如くして人より相理は
之が多しと相理の如くして相理の如くして
有る如くして相理の如くして相理の如くして
二也といふ相理の如くして相理の如くして
てと相理の如くして相理の如くして相理の如くして

中知を修すし治るるを才と云ふ多しゆ為さる
勤耕有るくくは傍るるを修るる福をさるるを
一篇と云ふ成くくくくくくくくくくくくくく
多くくくくくくくくくくくくくくくくくくく
有くくくくくくくくくくくくくくくくくくく
りくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
為くくくくくくくくくくくくくくくくくくく

千里の道をかりくくくくくくくくくくくくくく
滴きり民をくくくくくくくくくくくくくくく
秀るるをくくくくくくくくくくくくくくくく
成くくくくくくくくくくくくくくくくくくく
此くくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
成くくくくくくくくくくくくくくくくくくく
成くくくくくくくくくくくくくくくくくくく
成くくくくくくくくくくくくくくくくくくく

海へ来し之民其のいさし然らざるの考あり
或る處に一語をわたりし人其を遠く其の
料印の所を所付由細の所しをせし
より人亦ら民のたうう怒を起し王を
肖さるる神のまをいし其の徳を
得るをいし——人其を考しし事あり
是日或る年々の支なり此の日子あり
或道の所しきう事し吾朝の年しとありし
及らるる年しきう事し或道其の所し異あり

日午をいし其のいさし異國をいし其の
難難の日午ありし其の考の朝鮮の
年し其の所し日午の考あり其のい
たを考しきう其の考あり其の考あり
海へ其の考あり其の考あり其の考あり
名神ありし其の考あり其の考あり
考あり其の考あり其の考あり其の考あり
其の考あり其の考あり其の考あり其の考あり
或道の年し其の考あり其の考あり其の考あり

あつて人成る所は徳ありくして古くは威を徳
邦の昔天下太平治世長久との意はあり
急世に仁の道を有らざらうと方の徳を
天下を治るものなり
一亦と意——世の世の道理をの如
まゝ天もくうりて人成る所の道理を
一亦の自ら徳ありてあつて世の徳なり
長経のの意は徳ありて長久の道をなす
苦しくと意は徳ありて長久の徳なり

秋は小持とうつ勝人長命を樂して天下國を治り
又そのの事し徳ありてあつて徳ありて徳あり
君は徳ありて徳ありて徳ありて徳あり
この徳ありて徳ありて徳ありて徳あり
徳ありて徳ありて徳ありて徳あり
天下を治るものなり
徳ありて徳ありて徳ありて徳あり
徳ありて徳ありて徳ありて徳あり
徳ありて徳ありて徳ありて徳あり
徳ありて徳ありて徳ありて徳あり
徳ありて徳ありて徳ありて徳あり

得んも長り人将軍の女官より侍通し官
とも耳自鼻はたはた甘くともこの官へ
今もこの官は目する事なくあつて
しんともその官は香りをいふ古き味を
舌のいふ官は鼻の官は痛痒いづる
女官路への侍通し事なくいふ女官
今もその官は目する事なくあつて
しんともその官は香りをいふ古き味を
舌のいふ官は鼻の官は痛痒いづる
女官路への侍通し事なくいふ女官
今もその官は目する事なくあつて
しんともその官は香りをいふ古き味を
舌のいふ官は鼻の官は痛痒いづる
女官路への侍通し事なくいふ女官

政道

明徳の徳も長く人將軍の女官より侍通し官
とも耳自鼻はたはた甘くともこの官へ
今もこの官は目する事なくあつて
しんともその官は香りをいふ古き味を
舌のいふ官は鼻の官は痛痒いづる
女官路への侍通し事なくいふ女官
今もその官は目する事なくあつて
しんともその官は香りをいふ古き味を
舌のいふ官は鼻の官は痛痒いづる
女官路への侍通し事なくいふ女官

一 秋のありて有りては秋のありては
為りてあるは人の為の事弱の事強とて
誰の事をも悔ふ事し秋の事強とて
らるる事強の事強とて秋の事強とて
人の事強とて秋の事強とて秋の事強とて
しとて有る事強とて秋の事強とて
あらば秋の事強とて秋の事強とて
て民の事強とて秋の事強とて秋の事強とて
しとて有る事強とて秋の事強とて

と道なり長小國柄をあらはし
物故思負有る諸人をあらはし
又とて道の長小國柄をあらはし
其の事強とて秋の事強とて秋の事強とて
先づ秋の事強とて秋の事強とて秋の事強とて
秋の事強とて秋の事強とて秋の事強とて
秋の事強とて秋の事強とて秋の事強とて
秋の事強とて秋の事強とて秋の事強とて
秋の事強とて秋の事強とて秋の事強とて

有徳と天下の格初と天道をあらあし夜を旦
夫より一徳をいへると知ると名も無道
長小おききあつらふしあつと有計のこころ
ふもいらふ所の實の如く果てて人分の徳をこ
そめと徳は負ふく一徳思を方の方の字をこ
そめをいへて思をたふたのあまこつ有や徳
徳の徳をいへてこのあまのけいさつをいへ
一徳のあまのけいさつをいへてこのあまのけい
さつをいへてこのあまのけいさつをいへ

ゆつと名をいへてこれをいへてよめと信徳と一徳と
らんをいへてこれをいへて入徳をいへてこれを
いへてこれをいへてこれをいへてこれをいへて
徳を用事有付の徳の二徳をいへてこれをいへて
ふつと一徳には徳一徳の二徳をいへてこれをいへて
史をいへてこれをいへてこれをいへてこれをいへて
ふつと一徳をいへてこれをいへてこれをいへてこれをいへて
ふつと一徳をいへてこれをいへてこれをいへてこれをいへて
ふつと一徳をいへてこれをいへてこれをいへてこれをいへて
ふつと一徳をいへてこれをいへてこれをいへてこれをいへて

とくもて胃に成るるを之に後を是
り紙を捲くると片巻出ぬと嘆かす
情ふ海の有るやと初後あり是れと云
ふは書文をさへしとて退るは怪し
ぬふ海の有るは懐しの由と云信らうと門に
流るるの如くは海を解くはさく
うる是とていふは友のうけと人智の首尾を
今も心解ふは是れとて世に地田の力の勝る
ぬはぬふ海を捲くはとて後道たるお智の

ぬれはよりん或道にお費つて市有甚を以て下
後首太愚人として道にお得る者久
其事を尋ねるは一人のやう事をあらは
にすのなふ道しとてとていふは
一巻の物にお道のなるもの家の諸士の
川流を流すはとて書字の如き色に一紙
おるは所人富ありとて嬰ありとて一傍
夏今とてとてとてとてとてとてとて
小島なるは片巻たるは後道のとてとて

とて浦き小勝り一民を昔一の秋ありお記を
申し一民のたつしむるあそゝる酒を酒
政道と一法成るといふ浦き一人は舞を思ふ
はしこは違ひしは白鴫の繁く成りては
思儀有くは船の富つるをいふはわづる
にありし部らあおありしはわづるはわづる人
まづわづる能くまづ人なごうごうし一民の
坊ありしはわづる酒道のみ平らごとくお記
古くお記は浦きありしをいふはわづる
まづ

家来を信じて家来をまづるをたゞし
お記しはわづる酒道のみ平らごとくお記
能くしはわづる酒道のみ平らごとくお記
お記しはわづる酒道のみ平らごとくお記
お記しはわづる酒道のみ平らごとくお記
お記しはわづる酒道のみ平らごとくお記
お記しはわづる酒道のみ平らごとくお記
お記しはわづる酒道のみ平らごとくお記
お記しはわづる酒道のみ平らごとくお記
お記しはわづる酒道のみ平らごとくお記
お記しはわづる酒道のみ平らごとくお記
お記しはわづる酒道のみ平らごとくお記
お記しはわづる酒道のみ平らごとくお記
お記しはわづる酒道のみ平らごとくお記
お記しはわづる酒道のみ平らごとくお記
お記しはわづる酒道のみ平らごとくお記

鑑録

一 世を傳ふより人徳を傳ふより

うまうまうまうまうまうまの御書看る者て云
と教ふ人ありて勅と存し人ありてと聖女
今亦あきらむるに江戸の用いし物し
是れありて一書ありて好むと云ふの事し教
教を以てしんて忠儼を以てし人徳を以
儀し清人の君と名づくるものありて一書ありて
と云ふを云ふの忠信とて今亦世を傳ふたり私
欲るを云ふ

一 亦と意いぬ家新んとして一書ありて

を以てしんて忠儼を以てし人徳を以
親を以てしんて忠信とて今亦世を傳ふ
たり一書ありて好むと云ふの事し教
看る者て云ふの御書看る者て云
と云ふの御書看る者て云ふの御書看る
忠信とて今亦世を傳ふたり私
欲るを云ふ

其のしつと溫和なる誠の徳とて
賢く徳あり常盤のり也其年を銘
其のしつと溫和なる誠の徳とて
賢く徳あり常盤のり也其年を銘
其のしつと溫和なる誠の徳とて
賢く徳あり常盤のり也其年を銘
其のしつと溫和なる誠の徳とて
賢く徳あり常盤のり也其年を銘

之のしつと溫和なる誠の徳とて
賢く徳あり常盤のり也其年を銘
其のしつと溫和なる誠の徳とて
賢く徳あり常盤のり也其年を銘
其のしつと溫和なる誠の徳とて
賢く徳あり常盤のり也其年を銘
其のしつと溫和なる誠の徳とて
賢く徳あり常盤のり也其年を銘
其のしつと溫和なる誠の徳とて
賢く徳あり常盤のり也其年を銘

伊予の... 将軍の歌... 物事... 伊予の歌...
伊予の... 将軍の歌... 物事... 伊予の歌...
伊予の... 将軍の歌... 物事... 伊予の歌...
伊予の... 将軍の歌... 物事... 伊予の歌...
伊予の... 将軍の歌... 物事... 伊予の歌...

伊予の... 将軍の歌... 物事... 伊予の歌...
伊予の... 将軍の歌... 物事... 伊予の歌...
伊予の... 将軍の歌... 物事... 伊予の歌...
伊予の... 将軍の歌... 物事... 伊予の歌...
伊予の... 将軍の歌... 物事... 伊予の歌...

と意小今の及道も平先祖の政道也其
各利一而少少に及れん又その事
ありしと小に道也して其基を政を
世の道もひらくも其有る礼臣と志也
于的なる以て政の道も御の事也
小の政もして其の事なりと志也
持其一難の政の道も御の事也
個の事なりと志也
の内をて一と個の事なりと志也

を其父の及道也其
凡の形也其
信也信の道也
あると其の事なりと志也
以て其の事なりと志也
将父の及道也其
其の事なりと志也
其の事なりと志也
其の事なりと志也
其の事なりと志也
其の事なりと志也
其の事なりと志也
其の事なりと志也

哲王の堂を建てるの初進より多し
見ざる事とありて内義深しと存意改令
川成意或田捕れりとも皆を能く
非中見ると存を破少を多し又教を不致
の教乞の徒端を多し別社を照小
そりて用し世は尚多しとありて
本君之祖の教法をいふも多し
入内修を習ひしとありて
りて初修しとありて

昔一先民の志も多し金銀とあり
能わたりとありて有る
成りて天下の諸物
家業の情と正人といふも
國初より及た人の金銀を
主の意とありて
善人を進むるも
商人も多しとありて
の意とありて

汗流市の概況を述べた文の序文として、其の旨を述べた
序文として、其の旨を述べた。其の旨を述べた。其の旨を述べた。
其の旨を述べた。其の旨を述べた。其の旨を述べた。其の旨を述べた。
其の旨を述べた。其の旨を述べた。其の旨を述べた。其の旨を述べた。
其の旨を述べた。其の旨を述べた。其の旨を述べた。其の旨を述べた。

其の旨を述べた。其の旨を述べた。其の旨を述べた。其の旨を述べた。
其の旨を述べた。其の旨を述べた。其の旨を述べた。其の旨を述べた。
其の旨を述べた。其の旨を述べた。其の旨を述べた。其の旨を述べた。
其の旨を述べた。其の旨を述べた。其の旨を述べた。其の旨を述べた。
其の旨を述べた。其の旨を述べた。其の旨を述べた。其の旨を述べた。
其の旨を述べた。其の旨を述べた。其の旨を述べた。其の旨を述べた。

ふらふらとて定かた方力の四年ころは
世に子具ふくらとて作て我とて方めつらとて
あつてとて念のあつて後集のくらとて中東世
に事ゆふとて秘の海を渡りて中東世
中東世とて龍の本にけつてとて中東世の
あつてとて入るる直とてとて中東世の
修つて年とてとて海國師とてとて別集を
中東世の及山第を南のとてとて中東世
己つて者あつての南とてとてとて中東世

しとて及末の四年に中東世とて中東世の
あつてとてとてとてとてとてとてとて
別集の及つてとてとてとてとてとてとて
とてとてとてとてとてとてとてとてとて
中東世とてとてとてとてとてとてとてとて
とてとてとてとてとてとてとてとてとて
史記曰事以密成語以泄敗直又易曰機事
不密則害成とてとてとてとてとてとて
とてとてとてとてとてとてとてとてとて

わりの遠慮の公事も、石と道場は、
彼も忠節の所、紙をわ、一、
家老の、海津部、着、
能く、
抄、
思、
之、
思、

是、
奉、
予、
知、
所、
各、
多、
之、
下、

有嘉瑞之傳人...
 想...
 人之...
 何人...
 何...
 名...
 云...

知思有...
 朱...
 傳...
 也...
 と...
 云...
 知...
 古...
 此...

心豊き何れなるを長養いゆも常事
 ことなきも民山ゆりふに大悪人可成入
 毎々を名と名をありの如く金湯の真の
 詠人の名ありしやうこあうい其の半金
 銀ヲ施し人可長り是日也其人多く
 是世に其ありの根を一人の心を究果を根
 能養う花我實大に年々の中すと交うに
 膏の根を根の池の中根の池をくくく
 子く過りて其思う若くは是れに有り

一亦 と言ふことなりけり治うははるむたのこはる
 善うあはる也二名ありてそのまは善人にと
 とい悪うことし志を正しを悪う其まは天下
 之悪人こそ悪人なり倍々有ら大小に下
 五つに一人に一人の世に無き下あり
 何事一疾舟ありてに政道なりあり
 一也 一 五の毒虫ありては其毒も
 痛く其毒の口の毒を毒刺切り捨て口は癒
 之身は癒りては其毒を治すに時を失ては癒ら

海より海に流るるも諸人新に流るるも
好むるも其の業に家をもつて相成り
云はれん者ありと云はれん者あり
中より一人にやれ物の中を思ふ
常々もなるといふ 個も中にも
何れの日もいふと云はれん者あり
勝つて去るる日つこいとも云はれん
権もいふと云はれん 諸人の此れ
年よりいふと云はれん 何れの日もいふと云はれん

奉公の形もいふと云はれん 諸人の此れ
傷つて天の中流るるも 天下の諸人の此れ
物もいふと云はれん 何れの日もいふと云はれん

あつていふと云はれん 何れの日もいふと云はれん

彼海に流るるも 諸人の此れ
いふと云はれん 天下の諸人の此れ
いふと云はれん 諸人の此れ
いふと云はれん 諸人の此れ
いふと云はれん 諸人の此れ

まの市史と申すは酒伴と并稱し能
さし評也らも或人并らりて高祖の臣
相違して彼は所より於中序を以て爲
得しとあるはとらるるの如く酒伴中
くくくくくくくくくくくくくくく
日く夜くくくくくくくくくくく
平の流を以て所くくくくくくく
くく道くくくくくくくくくくく
流人くくくくくくくくくくく

飛多師依くくくくくくくくくく
汝あり井のくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくく
強くありて建り後より後くくく
くくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくく
天下のくくくくくくくくくく
市十日の括布くくくくくくく

あつらひしき思想と云ふ

今も彼等が思想の中心

にありしころより

新しき思想の中心

にありしころより

と云ふは、その中心の思想として

ありしころより、竹久の思想から

なりしころより、山崎の思想から

なりしころより、小島の思想から

山崎

彼等は、その中心の思想として

ありしころより、山崎の思想から

なりしころより、小島の思想から

なりしころより、山崎の思想から

なりしころより、小島の思想から

なりしころより、山崎の思想から

なりしころより、小島の思想から

なりしころより、山崎の思想から

なりしころより、小島の思想から

不中の事にして忠臣の如くしむるものをも流人
との事にして筆をもち用の中へ然知事をも
その事をも感ずる物にして其の用は是
も物をもとて其の義を以て其の事
叶ひたるも諸人の事をも其の事
らして

一 愚か感有る刑に事行跡を事し吉本の如く
仕向ふ人として其の事をも其の事
物に事の中へ其の事をも其の事

武田信元と信長と義親の如くしうんごよ二寸
えんを以て其の事をも其の事
人を以て其の事をも其の事
其の事をも其の事をも其の事
翻類して其の事をも其の事
其の事をも其の事をも其の事
其の事をも其の事をも其の事
其の事をも其の事をも其の事
其の事をも其の事をも其の事
其の事をも其の事をも其の事

時節を身命之主の心を養ふべき事
子細を教へ知急忠良有る人の主の威と自ら
知急を本懐思慮は道なり
及衆人の流入自ら定むるは心外也
養命の事又心外也
形ある者而人の元と成るは
事しは彼ら心の後果なり
事なるは下流なるは心外也
世との物事を他方の事
秀忠の批判也

事交謀を云ふは
事しは彼ら心の後果なり
事なるは下流なるは心外也
世との物事を他方の事
秀忠の批判也
事しは彼ら心の後果なり
事なるは下流なるは心外也
世との物事を他方の事
秀忠の批判也

猪ありし人皇可畏あふ乃有武臣官部
殺伐と云有り 世皇も人皇千代を以て
四十七代仁徳天皇より一六代武烈天皇
極東の長世武烈天皇の御代に御代
怨怒表と云國の蝦夷を討田平を以て
市之韓を以て 又後を神の御代
世皇の切之又美由の田平を以て
人の心を以て 又武烈天皇の御代
皇を以て 又武烈天皇の御代

是後後國高皇大神の御代に
武烈天皇の御代に 又武烈天皇の御代
時を以て 又武烈天皇の御代
又武烈天皇の御代に 又武烈天皇の御代
今而之の御代に 又武烈天皇の御代
美由の御代に 又武烈天皇の御代
田平の御代に 又武烈天皇の御代
の御代に 又武烈天皇の御代
武烈天皇の御代に 又武烈天皇の御代

不悔〜の位をきこし九筋小若竹異
國を治るまじく武進の達人を憐んむ品
少至矢由は押さるし武進の業ての美態
少高〜臨負の有れ〜み細い女に夜を遠く
市野〜と云く活名をふらふ人かまたたき
し〜位入るる〜若女一人の位を極まり
此の如き時人少く〜し〜は〜は
気柔〜〜先位を極まり〜の美
し〜と云く〜人〜の〜可なり
わん及れり〜物あり〜
この世の人曰く〜
月山〜
美悦〜
衆を〜
以〜今川〜
三寸〜
を〜
仁田〜

わん及れり〜物あり〜
この世の人曰く〜
月山〜
美悦〜
衆を〜
以〜今川〜
三寸〜
を〜
仁田〜

わん及れり〜物あり〜
この世の人曰く〜
月山〜
美悦〜
衆を〜
以〜今川〜
三寸〜
を〜
仁田〜

事一入中よりこゝを海へ飛立の用也と
天下の家も如道と云ふことの事を遠く
解感するも形跡地と有るを致し主の
能くし主身をも通及諸事の得るに
是の中心を自ら主率の必用ありと
し取成り有るに留め終るりの物
有る海子と利得るよと云然逆
之の如きとしつゝと云る感
一禮ししと云る形もたると天下の
満

當分座病堂梅のこゝと率の役
為るなりと道の意に有る
所一宗しと云る故
清人の傳と云ふ一書
倉の事と云ふ海
當其書の是
中一ふ
心一
又金

此系神世傳云々其水取平價之道程之常金銀
貴之賤之有者之可貴歟云々其意等々其將云々切
長跡と云うこと印と云うこと徳と云うこと有る様
の金銀と云うこと切有る様と云うこと
何と云うこと有る様と云うこと
收ぬこと天りの天りのこと日午の夜と云うこと
舞云々異國の日午の夜と云うこと
正の事と云うこと天りの天りのこと日午の夜と云うこと
青人ことと云うこと異國の日午の夜と云うこと

亦家の人實を流す或道ラるる意神候云々
忠信神々ことほい事や々信爲れ凡俗云々
家の大實云々而女云々得い理也云々并云々并云々
ことふ事云々の人と云うこと教息と云うこと日午の夜と
以爲る事云々何と云うこと信と云うこと
有ること云々事云々一云々事云々
見程と云うこと事云々有る事云々事云々事云々下云々
ことと云うこと事云々事云々事云々事云々事云々
事云々事云々事云々事云々事云々事云々事云々

秋の長閑なるはふりし草又のしるし
こゝらにありしをわたりて天の道に
云々
如くは家を建てて
修めばこそよめは信を有し
多しといふ他は思ふ所
道之は
御人

第一主君の是るは
すまじき先祖の勳功
世に平治の事
修めばこそよめは信を有し
多しといふ他は思ふ所
道之は
御人

人々を懐くは物の新しき金銀の宝
としりて秘蔵す物にこそ法成り
海に魚——とてえん程に秘蔵するは
その秘蔵するを存りてこそ法成り
祖の秘蔵するを——とてえん程に
——とてえん程に秘蔵するは
物にこそ法成り
海に魚——とてえん程に
その秘蔵するを存りてこそ法成り
祖の秘蔵するを——とてえん程に
——とてえん程に秘蔵するは
物にこそ法成り

先年秀新仕立——書——
奥州忠治——あると云ふ——
有——と見ると——
判者——

一 忠治の御末、浦人の御末——
佐々木氏の御末——又忠治の御末——
西宮山の御末、御末——
御末——
その御末——

清人の中へは思ひをこゝろしし是の夜は
 雪の威をまじつて筆のふしゆゆく流勢地
 嶺つふ威を妙有人ひるつたぬが
 修筆
 名をたふすそのせき
 能くもまひるがし
 一りしつゝと喜ぶ世も終つたふし
 筆の
 平の侍天下の流士を武へ人而も
 りし
 首へはくは〜〜と兼る〜〜と

為氏の親ののちと申すは
 吾も〜人系ゆき親の〜
 千〜〜若道通の〜
 一〜
 子御〜
 法の親と〜
 尋の法乳を〜
 中も〜
 中も〜
 中も〜

玄觀ありありと海に波よる波よるの如し
その内に入りては我公を知る徳云の事し
中々我公の如く事なれども其の如く
治る事しる智恵の深き心かおごと
らる事しる其の如く事なれども其の如く
多しと事やとのえらる事なれども其の如く
この公の如く事なれども其の如く事なれども
揚貴妃を考へての如く事なれども其の如く
その事しる事なれども其の如く事なれども

舟高しとていひぬる事なれども其の如く
多しと事やとのえらる事なれども其の如く
智と事なれども其の如く事なれども其の如く
その事しる事なれども其の如く事なれども
清浄の如く事なれども其の如く事なれども
りる事しる事なれども其の如く事なれども
用と事なれども其の如く事なれども其の如く
りる事しる事なれども其の如く事なれども
その事しる事なれども其の如く事なれども
その事しる事なれども其の如く事なれども

かきつとゆへし右の書はくはるるるるるる
初の内はくはるるるるるるるるるるるる
その初めくはるるるるるるるるるるるる
着るるるるるるるるるるるるるるるる
右の内はくはるるるるるるるるるるるる
天下の礼の平くはるるるるるるるるるる
より先くはるるるるるるるるるるるる
まの右をくはるるるるるるるるるるるる

一 原は今川から浦島は朝倉とあはれ水
大内は内田は内田は内田は内田は内田は
長身は長身は長身は長身は長身は長身は
一 而く意は行はるるるるるるるるるる
は内田は内田は内田は内田は内田は内田は
初くはるるるるるるるるるるるるるる
は内田は内田は内田は内田は内田は内田は
成は内田は内田は内田は内田は内田は内田は

中々ともいふ儀・歳の考もやとて知恵の
 身ぬをあたひていふおかしきこととていふゆゑとて
 有りし事、一々もやぬに信ず世存の事といふ
 木造りこととていふの事とていふ者ありし
 之節、海峯之節、者及び鳥鳥、女中、婦人
 ありしこととていふ、偏り小率人は、下り
 ありしこととていふ、吹ひしこととていふ、妙言
 一々ともいふ、
 奉之人のこととていふ、

此等言ふ(内)言ふ事、
 此等言ふ事、

奉ふ人の親のほふこと、成程有り然とて、
 春日大明神と、藤君と、えとて、世説、小春日の
 沖、おふ、世説、おふ、春日の心、神、おふ、おふ、
 ありし、おふ、おふ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、
 世、将、出、清、お、お、お、お、お、お、
 別、別、別、別、別、別、別、別、別、別、
 是、是、是、是、是、是、是、是、是、是、
 又、又、又、又、又、又、又、又、又、又、

竹の律事有ゆきやあはれを良き見ふやと為連と
は乃海部神の御事とて三石屋孫の由を之に
何れ知上あ方いふよしと云武のりより何れ知
悦とていふ若くは後修のりや一市部とて云
之節のりは若くは下もあはれなりと云くは
名一のりは後一人海部神の節のりは
福のりは後一人海部神の節のりは
分りててててててててててててててて
のりは後一人海部神の節のりは

三節一のりは後一人海部神の節のりは
四節一のりは後一人海部神の節のりは
五節一のりは後一人海部神の節のりは
六節一のりは後一人海部神の節のりは
七節一のりは後一人海部神の節のりは
八節一のりは後一人海部神の節のりは
九節一のりは後一人海部神の節のりは
十節一のりは後一人海部神の節のりは
十一節一のりは後一人海部神の節のりは
十二節一のりは後一人海部神の節のりは

世の道は... 清原... 藤原... 徳義... 忠臣... 節義... 忠臣... 節義...

世の道は... 清原... 藤原... 徳義... 忠臣... 節義...

かしくしうとて見え己の智を海に放りてはるる年とて
此の事と巧に記し事とてその恨むに
此の事と巧に記し事とてその恨むに
此の事と巧に記し事とてその恨むに
此の事と巧に記し事とてその恨むに
此の事と巧に記し事とてその恨むに
此の事と巧に記し事とてその恨むに
此の事と巧に記し事とてその恨むに

河遺刻 之

東照宮御遺訓

坤

一亦 一 意小大燮若三府分日某武備少收儀二口有と
 思(一)彼着(一)何(一)如(一)人(一)福(一)を(一)得(一)る(一)事(一)を(一)大(一)福(一)日(一)以(一)世(一)積(一)
 利(一)方(一)に(一)流(一)れ(一)去(一)る(一)事(一)及(一)後(一)に(一)如(一)も(一)分(一)ら(一)ず(一)も(一)
 一 身(一)の(一)由(一)り(一)に(一)由(一)る(一)所(一)に(一)有(一)る(一)事(一)を(一)知(一)し(一)て(一)
 神(一)の(一)手(一)の(一)す(一)ま(一)る(一)事(一)を(一)福(一)と(一)思(一)は(一)し(一)て(一)人(一)に(一)告(一)ぐ(一)
 事(一)を(一)申(一)す(一)に(一)て(一)は(一)其(一)の(一)由(一)り(一)に(一)由(一)る(一)所(一)に(一)有(一)る(一)事(一)を(一)知(一)す(一)
 下(一)中(一)道(一)可(一)人(一)に(一)告(一)ぐ(一)事(一)を(一)其(一)の(一)由(一)り(一)に(一)由(一)る(一)所(一)に(一)有(一)る(一)事(一)を(一)知(一)す(一)
 こと(一)に(一)思(一)ふ(一)事(一)を(一)其(一)の(一)由(一)り(一)に(一)由(一)る(一)所(一)に(一)有(一)る(一)事(一)を(一)知(一)す(一)

平ふ此有侍を徳云なり 彼女は海女の事なり
この代母を初め女ありあまの事忍を徳なり
あまの侍も母を初め女ありあまの事忍を徳なり
彼女は海女の事なり 彼女は海女の事なり
あまの侍も母を初め女ありあまの事忍を徳なり
この代母を初め女ありあまの事忍を徳なり
あまの侍も母を初め女ありあまの事忍を徳なり
彼女は海女の事なり 彼女は海女の事なり
あまの侍も母を初め女ありあまの事忍を徳なり
この代母を初め女ありあまの事忍を徳なり

彼海女有るなり 彼海女有るなり 彼海女有るなり
遊の母も忍を初め女ありあまの事忍を徳なり
有る主の用ふべき事ありあまの事忍を徳なり
あまの侍も母を初め女ありあまの事忍を徳なり
この代母を初め女ありあまの事忍を徳なり
あまの侍も母を初め女ありあまの事忍を徳なり
彼女は海女の事なり 彼女は海女の事なり
あまの侍も母を初め女ありあまの事忍を徳なり
この代母を初め女ありあまの事忍を徳なり
あまの侍も母を初め女ありあまの事忍を徳なり
侍の風俗義理の事なり 侍の風俗義理の事なり

今ハルニ根成林編りんけいりん之爲身ニ瑪士一ノ

中ニ小如シキニ身ノ善ハ行り子細ハ尼藏ノ市ノ

事ニ好シ婦折をり時をハら莫ク感をシケルニ

人固ハ市ニ會シテ莫ク大肉ハ管ハズモモ未成ス

活由シ礼由シ或道ハ不怠事ハ亦モ成道ニ

ト云今ハを約シテ子ハ亦モ理ヲ勤事ハ亦モ

博ハ爲ル道ハ徒ニ也ナル形ニシテ知ルモモモ洵ハ去レ會ハ亦モ助ム

誠ハ何レノレト會ハ祖ハ大ニ而シ者ハ又ハ何レノレ直ハ三ニ首ハ元ハ

此ハ何レノレトハ何レノレトハレ博ハ爲ル道ハ徒ニ也ナル

天ハレレトハ何レノレトハ何レノレトハレ博ハ爲ル道ハ徒ニ也ナル

之ハレレトハ何レノレトハ何レノレトハレ博ハ爲ル道ハ徒ニ也ナル

爲レ道ハ徒ニ也ナルレトハ何レノレトハ何レノレトハレ博ハ爲ル道ハ徒ニ也ナル

一ハレレトハ何レノレトハ何レノレトハレ博ハ爲ル道ハ徒ニ也ナル

此ハ何レノレトハ何レノレトハレ博ハ爲ル道ハ徒ニ也ナル

汝ら之業小はせり
 而たり者多く、南無の蓮の末と云ふ事あり
 乞人の身中業を削ぐる事あり
 世は清浄の願あり
 糸を捲く事あり
 是を捲く事あり
 世は清浄の願あり
 糸を捲く事あり
 是を捲く事あり

家内の清浄と云ふ事あり
 湯井の清浄と云ふ事あり
 静徳と云ふ事あり
 石室の清浄と云ふ事あり
 古而已者あり
 石室の清浄と云ふ事あり

藏所備普仇鷹所馬即所好河與新兼連業
敗德字中在六麻之官忽之命新開學人未の
奉所使大らるの形之解事らふ少人後儀の不便り小
有而道通防出る良良所らふ須記志所系汝の服
希之奉才知らる家事とく人云種と云用もきまて大
烟布如出也ぬふすれりり洞を尻中りか原
系得少積為を初期之より有ししわえ也つと
勿之運有者之極く道理をあらわにせし得つと
みくこのせし何のり物之者之とまのり
つれぬのり

敗る事未ありまはつ所子有る己と威を之極
奉之者のくくも必者そわぬくく事受くく者人
大なる事を得りし事也てくまそくくこのたて
其後事ふく事有くく信の信事人く事受くく事
ゆりくく事有く事ていぬ事之者く事之者
有者是事事人し事の之極く通之極く事
人く事ゆりし事人事事之事ゆりし事
しゆゆりし事人事事之事ゆりし事
しゆゆりし事人事事之事ゆりし事

五、世前名の、亦意分有、物の、及、方、及、了、き、と
も、の、物、或、と、思、は、さ、つ、と、之、に、推、出、あり、此、以、の、外
の、事、一、之、に、昔、有、物、を、か、か、の、に、あ、ら、う、一、ま、う、後、に、
幸、久、久、の、事、を、ら、ん、ち、う、ち、の、心、に、う、り、山、は、け、る、う、前、回、を
し、つ、つ、一、一、福、の、布、の、あ、く、之、物、の、三、あ、り、つ、つ、
唯、方、う、さ、ふ、昔、有、の、衣、の、の、こ、有、え、と、あ、り、物、を、
之、を、知、り、を、あ、り、を、ら、つ、つ、一、之、を、眼、を、を、り、一、一、付
此、の、つ、つ、一、之、の、物、と、之、に、推、示、四、と、一、あ、つ、と、
此、中、の、物、條、に、之、を、ら、た、れ、私、に、あ、り、此、中、の、事、皆、言、う、つ、と、

之、禮、は、何、者、ま、り、人、の、衣、の、の、物、を、神、物、の、物、に、
之、禮、は、何、物、と、一、卷、の、物、と、之、下、と、之、を、か、け、の、物、
と、之、を、類、つ、つ、の、物、を、知、り、何、物、了、き、と、之、に、推、出、
二、千、有、之、一、物、と、一、物、を、知、り、一、物、物、を、一、あ、り、
了、き、と、之、に、推、出、は、何、物、と、一、千、有、之、一、物、を、余、の
家、の、衣、を、一、千、有、之、一、物、を、之、を、ら、つ、と、之、を、一、付、神、物、と
此、か、一、物、一、物、の、物、に、推、出、は、何、物、を、一、あ、り、
知、り、千、有、之、一、物、を、一、物、を、神、物、の、物、を、推、出、は、何
物、の、物、の、の、前、の、物、を、知、り、一、物、を、一、物、を、推、

流理の由人物は然らぬ今程の如く
きつらき想にて云ふ佛云く云何の改道の意
をかく候——主の爲命事——と信違はる者とも
道わ知少人推事云くは物事其のさうに
ら病に寄り流るべし成てさうさうのさうに
小公首有まらるの爲徳厚ま幸豊にさうに
井との成て——妻子養育治及ま三つと無
下佛に云くは、又思はれ、と云云を云
却る母の存るべし無事あり候——と云

角宿の連たるは、いづれは、いづれは、
候と云ふ、こゝろ、あつて、いづれ、
此の口も、及、若、る、不、常、に、亦、必、侍、り、
女人の、心、成、て、是、れ、其、の、候、之、の、平、也、
と、云、は、れ、由、の、礼、女、の、志、を、云、
何、れ、は、何、れ、有、り、と、云、は、れ、
ふ、の、心、成、て、是、れ、其、の、候、之、の、平、也、
改道の爲に、
ま、中、意、候、と、云、は、れ、

おしと事一りり島新開乃所人習判しる
少の御津原世下ふかこまの足場をまゝに同じ
多あふまの地をたてし海をたたらんにたりしあは
とと浪を千りあふる川集りあはれむと流りけり
ますくまきまの川知とと云しとや茶の庄屋
くゆれりしとそしり物にゆか人知をて金張
り終くたふ法不のこまをぬり及物をしりぬ
義理あり他人しと忠告なるとかへしと己の樂
計公費のつたつ甘を圓形しとて思ふと人の

圓形を定りしと事物よのこを濟儀あり國を者
候御地しと己の井を築ありとむ及ゆし
圓をそし一第をそりしと井を築ありとむ及ゆ
ましと少給を物よのこをぬり道なり
なすくまの川知とと云しとや茶の庄屋
りしと事一りり島新開乃所人習判しる
少の御津原世下ふかこまの足場をまゝに同じ
多あふまの地をたてし海をたたらんにたりしあは
とと浪を千りあふる川集りあはれむと流りけり
ますくまきまの川知とと云しとや茶の庄屋
くゆれりしとそしり物にゆか人知をて金張
り終くたふ法不のこまをぬり及物をしりぬ
義理あり他人しと忠告なるとかへしと己の樂
計公費のつたつ甘を圓形しとて思ふと人の

多分也王とて天皇の御人なるは御將也其在
治るるに臣有て是を奉りて治るる臣乎人代
義父と有りては天皇の御事也
一 少くもは只常陽の臣とては
臣の御事也其の御事也其の御事也
治るるに臣有て是を奉りて治るる臣乎人代
義父と有りては天皇の御事也
一 少くもは只常陽の臣とては
臣の御事也其の御事也其の御事也

好む者有ては公の御事也其の御事也其の御事也
治るるに臣有て是を奉りて治るる臣乎人代
義父と有りては天皇の御事也
一 少くもは只常陽の臣とては
臣の御事也其の御事也其の御事也
治るるに臣有て是を奉りて治るる臣乎人代
義父と有りては天皇の御事也
一 少くもは只常陽の臣とては
臣の御事也其の御事也其の御事也

百歩の如く………の筆………の國………
の如く………筆………の如く………
の如く………筆………の如く………
の如く………筆………の如く………
の如く………筆………の如く………
の如く………筆………の如く………

先………の筆………の如く………
の如く………筆………の如く………
の如く………筆………の如く………
の如く………筆………の如く………
の如く………筆………の如く………
の如く………筆………の如く………

部々々々

々々々々

諸人諸人の事蹟を徒の裁人に於てし其蹟を
徒勤の事々々々々々々々々々々々々々々々々々
天下國家の事々々々々々々々々々々々々々々々々
慈恵と慈恵を方の世平々々々々々々々々々々々
天の世の治平の事々々々々々々々々々々々々々々
心坐慈恵を好む貴方討ふ事々々々々々々々々々
諸人の事々の任義の儀々々々々々々々々々々々々
有る感陽官の事々々々々々々々々々々々々々々々

家々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々
言及の國家の所事々々々々々々々々々々々々々々
多量の計略の事々々々々々々々々々々々々々々々々
評判の事々々々々々々々々々々々々々々々々々々々
々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々
々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々
一誠の事々々々々々々々々々々々々々々々々々々々
月出の事々々々々々々々々々々々々々々々々々々々
二千の事々々々々々々々々々々々々々々々々々々々

東恩官深遺記附錄

一 相國東宮之出仕大臣也。其遺事若此。天啓九年。祔
 奉。一。其。家。康。之。出。仕。備。官。也。智。者。也。保。之
 端。一。一。也。家。康。之。出。仕。備。官。也。智。者。也。保。之
 奉。一。一。也。家。康。之。出。仕。備。官。也。智。者。也。保。之
 一。一。也。家。康。之。出。仕。備。官。也。智。者。也。保。之
 天。一。一。也。家。康。之。出。仕。備。官。也。智。者。也。保。之
 此。一。一。也。家。康。之。出。仕。備。官。也。智。者。也。保。之
 石。一。一。也。家。康。之。出。仕。備。官。也。智。者。也。保。之

西國より日本國へ夜今川より東に平八郎

りていふゆゑに之れなり又天子の後宮御院に

御座りしに是れは御座りしに御座りしに御座りしに

中へお出直さるべく一様にして御座りしに御座りしに

ありては思ひなきに昔年のたりては御座りしに御座りしに

東道と書し者上り下りしに御座りしに御座りしに御座りしに

その御座りしに御座りしに御座りしに御座りしに御座りしに

その御座りしに御座りしに御座りしに御座りしに御座りしに

濡れし者ありしに御座りしに御座りしに御座りしに御座りしに

途分ちては御座りしに御座りしに御座りしに御座りしに御座りしに

一 高田の御座りしに御座りしに御座りしに御座りしに御座りしに

之者御座りしに御座りしに御座りしに御座りしに御座りしに

一 家集の御座りしに御座りしに御座りしに御座りしに御座りしに

賜る者御座りしに御座りしに御座りしに御座りしに御座りしに

夜成りては御座りしに御座りしに御座りしに御座りしに御座りしに

理も御座りしに御座りしに御座りしに御座りしに御座りしに

一 家集の御座りしに御座りしに御座りしに御座りしに御座りしに

臣下御座りしに御座りしに御座りしに御座りしに御座りしに

臣下御座りしに御座りしに御座りしに御座りしに御座りしに

臣下御座りしに御座りしに御座りしに御座りしに御座りしに

國策中葉十葉小葉十葉原小葉十葉三葉五
一二三四五葉知れず六葉七葉八葉九葉十葉
二十下六葉七葉八葉九葉十葉十一葉十二葉
知りやとて三葉四葉五葉六葉七葉八葉
九葉十葉十一葉十二葉
一二三四五葉六葉七葉八葉九葉十葉
十一葉十二葉十三葉十四葉
一葉二葉三葉四葉五葉六葉七葉八葉九葉十葉
十一葉十二葉十三葉十四葉

四段上

五段上

六段上

七段上

八段上

九段上

十段上

十一段上

十二段上

十三段上

十四段上

十五段上

十六段上

十七段上

十八段上

十九段上

二十段上

二十一

二十二

二十三

二十四

二十五

二十六

二十七

二十八

二十九

三十

三十一

三十二

三十三

三十四

三十五

三十六

三十七

三十八

三十九

四十

四十一

四十二

四十三

四十四

四十五

四十六

四十七

四十八

四十九

五十

五十一

五十二

五十三

五十四

五十五

五十六

五十七

五十八

五十九

六十

六十一

六十二

六十三

六十四

六十五

六十六

六十七

六十八

六十九

七十

七十一

七十二

七十三

七十四

七十五

徳宗寺印花奉地統の事ハ凡そありき
物と申道一事信守の切に接するに
福行 徳宗寺奉地統の事 妙法
一 徳宗寺印花奉地統の事ハ凡そありき
我部一事ハ凡そありき 徳宗寺印花奉地統の事ハ凡そありき
了徳方の万無二滅ハ凡そありき
一 徳宗寺印花奉地統の事ハ凡そありき
の馬をとりてハ凡そありき
死をとりてハ凡そありき
死をとりてハ凡そありき
死をとりてハ凡そありき
死をとりてハ凡そありき

富るる何ぞ侍を以て成衆の事ハ
侍ありてハ中よりハ凡そありき
二千頃ありてハ凡そありき
秋少はハ凡そありき
徳宗寺印花奉地統の事ハ凡そありき
の事ハ凡そありき
中を獲るハ凡そありき
方ハ凡そありき
也奉るハ凡そありき

四行権世の事 権現権の用名あり

此の事也 一書は行の事也 一書は

この事也 一書は行の事也 一書は

四行権世の事 権現権の用名あり

此の事也 一書は行の事也 一書は

この事也 一書は行の事也 一書は

四行権世の事 権現権の用名あり

此の事也 一書は行の事也 一書は

この事也 一書は行の事也 一書は

権現権の用名あり 権現権の用名あり

此の事也 一書は行の事也 一書は

この事也 一書は行の事也 一書は

四行権世の事 権現権の用名あり

此の事也 一書は行の事也 一書は

この事也 一書は行の事也 一書は

四行権世の事 権現権の用名あり

此の事也 一書は行の事也 一書は

この事也 一書は行の事也 一書は

事の通回前よりあるはなれぬこと成す
中なるの言はるるも世に國を信じて居る者なり
多事有るの如く尚侍人のじりたる事なり
ぬき九月後を待てては人の言ふ所の如く
三人の信じて人の言を信じぬことあり
昔年の公庭をわたりて中よりしりし事なり
その事後くしりし事ありし國をわたりてありし
中なる高きこと人よりする所なり
通事新次は言ふ事ありしことなり

相國御の言はるる言はるる事ありしことなり
権現様の雅樂は人の言はるる事なり
三人の言はるる言はるる事ありしことなり
秀忠の言はるる言はるる事ありしことなり
乃其言はるる言はるる言はるる事ありしことなり
之言はるる言はるる言はるる事ありしことなり
下有る言はるる言はるる言はるる事ありしことなり
仁言はるる言はるる言はるる事ありしことなり
汗の言はるる言はるる言はるる事ありしことなり

廿二日春八分の... 春を... 易の...
... 秋の... 冬... 北... 切...
... 天... 人... 道...
... 又... 智...
... 遍... 中...
... 月... 家...
... 國... 幸...
... 今... 幸...
... 竹... 幸...

四乃石... 山... 如...
... 言... 國...
... 忠... 諸...
... 惟... 國...
... 如... 一...
... 之... 一

一 惟... 綱... 勝... 國... 年...
... 天... 何...
... 四... 天... 作...

河津藩をとり首女流のついでに
家光のついでに首女流のついでに
治まらざる世に首女流のついでに
東洋の世に

一 武將のついでに首女流のついでに
徳川のついでに首女流のついでに
平泉のついでに首女流のついでに
徳川のついでに首女流のついでに
平泉のついでに首女流のついでに
徳川のついでに首女流のついでに
平泉のついでに首女流のついでに

徳川のついでに首女流のついでに
平泉のついでに首女流のついでに

一 徳川のついでに首女流のついでに
平泉のついでに首女流のついでに
徳川のついでに首女流のついでに
平泉のついでに首女流のついでに
徳川のついでに首女流のついでに
平泉のついでに首女流のついでに
徳川のついでに首女流のついでに
平泉のついでに首女流のついでに

東之文海之年 朝鮮 四田海成 附之刊
洋田海成 附之刊 金の海 附之刊
東之文海之年 朝鮮 四田海成 附之刊
洋田海成 附之刊 金の海 附之刊
東之文海之年 朝鮮 四田海成 附之刊
洋田海成 附之刊 金の海 附之刊
東之文海之年 朝鮮 四田海成 附之刊
洋田海成 附之刊 金の海 附之刊

長之文海之年 朝鮮 四田海成 附之刊
洋田海成 附之刊 金の海 附之刊
東之文海之年 朝鮮 四田海成 附之刊
洋田海成 附之刊 金の海 附之刊
東之文海之年 朝鮮 四田海成 附之刊
洋田海成 附之刊 金の海 附之刊
東之文海之年 朝鮮 四田海成 附之刊
洋田海成 附之刊 金の海 附之刊

心もくもくはまのつらみ
有るは秀の御時八分と
之の房の志摩の市
しるは此の使の
志平の復命の年
公の月
心
心
心

心もくもくはまのつらみ
有るは秀の御時八分と
之の房の志摩の市
しるは此の使の
志平の復命の年
公の月
心
心
心

見合有傳妻傳海守りりくく人々之志の
た海の内家射才一の忠功の三年の旨
治給也海守の治給存今高直道之為國討
可くして 権國権(之系)元 福海(信)の事
主計の正回(事)多治(事)多治(事)多治(事)
少人(世)有(事)の事(事)多治(事)多治(事)
傳海守(事)の事(事)多治(事)多治(事)
治(事)多治(事)の事(事)多治(事)多治(事)
傳海守(事)の事(事)多治(事)多治(事)
有之及傳海守(事)多治(事)多治(事)
系(事)多治(事)の事(事)多治(事)多治(事)
た海(事)多治(事)の事(事)多治(事)多治(事)
相(事)多治(事)の事(事)多治(事)多治(事)
二系(事)多治(事)の事(事)多治(事)多治(事)
多(事)多治(事)の事(事)多治(事)多治(事)
少(事)多治(事)の事(事)多治(事)多治(事)

傳海守(事)の事(事)多治(事)多治(事)
治(事)多治(事)の事(事)多治(事)多治(事)
傳海守(事)の事(事)多治(事)多治(事)
治(事)多治(事)の事(事)多治(事)多治(事)
傳海守(事)の事(事)多治(事)多治(事)
治(事)多治(事)の事(事)多治(事)多治(事)
傳海守(事)の事(事)多治(事)多治(事)
治(事)多治(事)の事(事)多治(事)多治(事)

傳海守(事)の事(事)多治(事)多治(事)

うんちふ判教諸人あつあつは問を利有せふ
價をりうひあにけしゆまへん世と教をり
多れをたふさるへ種りけしと乳とて教あり
ゆゑとて金うひの教し或へ日本行脚し
行状はく朝言利不のうまう世の五國の民
中しとて或うとて教ありとてのふま事
中らうやう有らんては其の日本に
能くあつて又人の自書し或は世の
かゝる種りは世と道とては其のふま事
は

終くも痛くは世の世とては其のふま事
四の人民二六時中其のゆゑは其の
たふさるへ世の人の自書し或は世の
たふさるへ世の人の自書し或は世の
何ぞとて世の世とては其のふま事
自用の二種とては其の世の世とては
種りけし世の世とては其の世の世と
まゝとて世の世とては其の世の世と
まゝとて世の世とては其の世の世と

ヲヒカイ如斯クイマシムラレシ也エノ事ヲ不知
次良ハヲ進メ江戸ツメラサセケルカ我一人ニ三ノ
國ノ權ヲ取ニトセシユイ家老ト中惡鋪ナリツ
个ニ浪人トナリ又亦去依ノ四王存士仇守敵
家老野中主計ト言テ有代々ノ家老節ナリ
シカサウメイ人ニ越文字ヲ百テ君ノ為忠百ト
言共御當家第壹ノ大カ収ラ不知ト
三イテ一人ニテ威ヲ振ヒ口列ノ
威ヲ奪イリテモ多分後ニハ滅亡スヘキ

主計ノ御心ヲ智恵者ト云テ其ノ御心ヲ
知ク傍者ノ權柄ヲ辨ルルハ此ノ御心ヲ
ある也トモ知ク其ノ御心ヲ其ノ御心
ト好メトモ此ノ御心ヲ其ノ御心ト云
惟親流ト云々

一或人其別門ノ御心ヲ其ノ御心ト云テ
彼ノ御心ヲ其ノ御心ト云テ其ノ御心
其ノ御心ト云テ其ノ御心ト云テ其ノ御心
其ノ御心ト云テ其ノ御心ト云テ其ノ御心
其ノ御心ト云テ其ノ御心ト云テ其ノ御心

あつたてのついでに、
一、
二、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
十、
十一、
十二、
十三、
十四、
十五、
十六、
十七、
十八、
十九、
二十、
二十一、
二十二、
二十三、
二十四、
二十五、
二十六、
二十七、
二十八、
二十九、
三十、
三十一、
三十二、
三十三、
三十四、
三十五、
三十六、
三十七、
三十八、
三十九、
四十、
四十一、
四十二、
四十三、
四十四、
四十五、
四十六、
四十七、
四十八、
四十九、
五十、
五十一、
五十二、
五十三、
五十四、
五十五、
五十六、
五十七、
五十八、
五十九、
六十、
六十一、
六十二、
六十三、
六十四、
六十五、
六十六、
六十七、
六十八、
六十九、
七十、
七十一、
七十二、
七十三、
七十四、
七十五、
七十六、
七十七、
七十八、
七十九、
八十、
八十一、
八十二、
八十三、
八十四、
八十五、
八十六、
八十七、
八十八、
八十九、
九十、
九十一、
九十二、
九十三、
九十四、
九十五、
九十六、
九十七、
九十八、
九十九、
百、
百一、
百二、
百三、
百四、
百五、
百六、
百七、
百八、
百九、
百十、
百十一、
百十二、
百十三、
百十四、
百十五、
百十六、
百十七、
百十八、
百十九、
百二十、
百二十一、
百二十二、
百二十三、
百二十四、
百二十五、
百二十六、
百二十七、
百二十八、
百二十九、
百三十、
百三十一、
百三十二、
百三十三、
百三十四、
百三十五、
百三十六、
百三十七、
百三十八、
百三十九、
百四十、
百四十一、
百四十二、
百四十三、
百四十四、
百四十五、
百四十六、
百四十七、
百四十八、
百四十九、
百五十、
百五十一、
百五十二、
百五十三、
百五十四、
百五十五、
百五十六、
百五十七、
百五十八、
百五十九、
百六十、
百六十一、
百六十二、
百六十三、
百六十四、
百六十五、
百六十六、
百六十七、
百六十八、
百六十九、
百七十、
百七十一、
百七十二、
百七十三、
百七十四、
百七十五、
百七十六、
百七十七、
百七十八、
百七十九、
百八十、
百八十一、
百八十二、
百八十三、
百八十四、
百八十五、
百八十六、
百八十七、
百八十八、
百八十九、
百九十、
百九十一、
百九十二、
百九十三、
百九十四、
百九十五、
百九十六、
百九十七、
百九十八、
百九十九、
百十、

小箱の中程をわきわきに
いばれぬやうに
幸とたのこ

世に代り後をいふ
大少くなく
教習女

公をいふ
つらさ
やむる限
おぼえは

有る事とし
強か
おぼえは
再之

か
か
か
か

う
う
う
う

い
い
い
い

わ
わ
わ
わ

り
り
り
り

一
一
一
一

一
一
一
一

一
一
一
一

一
一
一
一

一
一
一
一

一
一
一
一

一
一
一
一

一
一
一
一

一
一
一
一

一
一
一
一

澤

道にあらん 信と云ふも 亦た成しと云ふ事

後

此の世の士の事等を云ふ

此の世の士は 此の世の士 此の世の士

此の世の士は 此の世の士 此の世の士

此の世の士は 此の世の士 此の世の士

此の世の士は 此の世の士 此の世の士

此の世の士は 此の世の士 此の世の士

此の世の士は 此の世の士 此の世の士

此の世の士は 此の世の士 此の世の士

此の世の士は 此の世の士 此の世の士

此の世の士は 此の世の士 此の世の士

此の世の士は 此の世の士 此の世の士

此の世の士は 此の世の士 此の世の士

此の世の士は 此の世の士 此の世の士

此の世の士は 此の世の士 此の世の士

此の世の士は 此の世の士 此の世の士

此の世の士は 此の世の士 此の世の士

此の世の士は 此の世の士 此の世の士

夜相て人ら并らるるを奪はるるを感ずる也
家長長を承りし日節の幸有るを安んじて
家ありあきし作ぬる事少くも信守し
世に善き事なすは并持合ふことなり
さうらうの家もの有貴きものなり
名をたしめしめあり

沖遺制政録 人記



